Core Ethics Vol. 8（2012）

論文

観光資源としての中国当代アート

――北京アートファクトリーの事例からの考察――

王　　　　屹*

はじめに

現在、筆者は、外国人観光客の誘致による地域活性化――アートの機能について研究を行っている。理論的な研究とともに、いくつかの具体的な事例を調査・分析する必要を感じた筆者は、2011 年 4 月から 6 月までの 2 ヶ月間あまり、中国・北京にて、アートファクトリー――北京「798 芸術区」についての調査研究を行った。本稿はその成果である。

先行研究として、『中国現代アート』[牧陽一 2007]、『アートのマネージメント』[伊東正伸・岡部あおみ・加藤義夫・新見隆 2003]、『観光の経済学入門』[中崎茂 2002] などがある。これらは、文化的若しくは経済学的な視点から、それぞれの研究分野において研究されたものである。本稿では、それとは別に、中国当代アートと観光客の誘致による地域活性化との接点から考察してみたい。

21 世紀の中国では、経済の急激な発展に伴い、人々は日常生活において、物質的な満足のみならず、より一層高いレベルとして、精神的な満足を追求するようになった。高価なブランド品、骨董品、美術品など、かつて身分と財力の象徴として、文化大革命で焼き尽くしたはずのものが、再びもてはやされるようになったのである。とりわけ近年では、市場経済の波に乗って、アートの商業化と国際化が急激に進展する中で、中国当代アートは一躍、世界的に注目され、中国内外の多くの観光客を惹きつける観光資源としての役割を果たすようになったといえよう。

本論文では、まず、中国当代アートの歴史、現状および発展について論述し、そして、北京アートファクトリー――「798 芸術区」について説明し、最後に、具体的に観光資源としてのアートの機能について考察していく。

1. 中国当代アート

1-1 中国当代アートの歴史・現状・発展

ここでのアートとは、芸術・美術のことである。広辞苑によると、現代アートとは、古典や近代美術に対比する形で定義される芸術である。現代芸術とも呼ばれる。

中国アートは、中国では普通、古代、近代、現代、当代という四つの時代に分けられている。(場合によって、古代、近代、現代という三つの分け方もあり、日本における研究では、古代、近代、現代という分け方が適用されているが、本論文では四つの時代に分けて論じていく。）すなわち、①清末のアヘン戦争（1840 年）以前の古代アート②アヘン戦争から辛亥革命（1911 年）までの近代アート③辛亥革命から新中国成立（1949 年）までの現代アート④新中国成立以後の当代アートである。本稿では、新中国成立後 1949 年からの当代アートに注目し、それを中心に分析していくことにする。

建国後、「写実主義」を代表する徐悲鴻[1]が美術界のリーダとなり、伝統国画の人文山水画は、改革を迫られた。

キーワード：中国当代アート、「798 芸術区」、観光資源、地域活性化

＊立命館大学大学院先端総合学術研究科　2011年度入学　表象領域

その時代に認められた内容は、重要な政治的課題を反映し、新中国の成立・豊かで楽しい新生活・領袖の肖像・労働英雄・ソ連との合作・抗米朝鮮戦争勝利・蒋介石打倒などである。（**図 1**）農民・労働者・兵士が重んじられる新中国では、彼らが愛好する大衆的・伝統的な美術が大幅に見直され、剪紙や折り紙、泥人形などの民間工芸アートも人民のアートとして積極的に広がった。

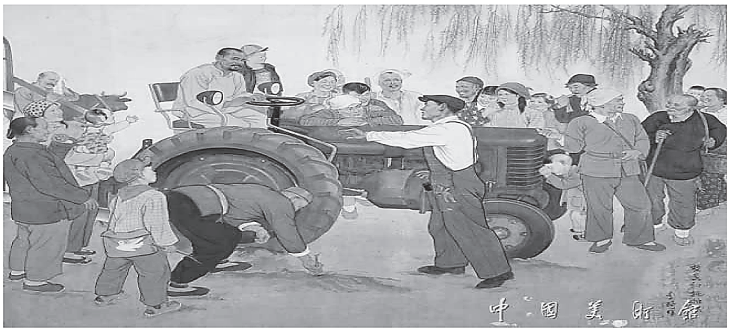

図 1　李琦[2]「农民和拖拉机」
（http://www.nongjitong.com/blog/2010/28311.html　2011.8.25）

1950 年に「社会主義の兄貴」と呼ばれるソ連に学ぼうというのが当時のアート界のスローガンで、ソ連アートの受容は主に油絵の分野で展開された。ソ連の油絵を導入するのと並行して、油絵の「民族化」すなわち中国的油絵という課題は、多くの油絵画家に、試みられた。彼らは伝統中国アートからその表現形式を吸収し、油絵の中国民族化をなしとげた。1954 年に創刊された『美術』[3]創刊号には、ソ連アートの作品紹介が全体の 13%、3 月号では 32%、11 月号では 100% もみられる。1955 年から 2 年間、ソ連は油絵の専門家を派遣し、中国人学生たちに油絵を指導した。中国革命の勝利を称え、歴史の功績を民衆教育に生かすために「革命歴史画」（**図 2**）の制作が急務とされていた。大型画面で迫力の表現を要求する歴史画には、油絵が最適であった。

図 2　董希文[4]「开国大典」
（http://www.cnarts.net/cweb/exhibit/show/newchina/meishu/5-1.asp　2011.8.25）

1956 年、中国のアーティストにとって、まるで「長い冬が終わり、初めて春の風を迎えられる」のようであった。アート界において、「百花斉放･百家争鳴」が提唱されたのである。しかし、こうした「春の風」は長続きしなかった。1958 年に急激な社会主義建設の方針──「大躍進」[5]政策がはじまり、アート活動は、質より量、芸術的成就より「革命精神」が重視されるようになった。

1966 年から 10 年間にわたる「文化大革命」で、アーティストのアート創作は中断された。中国のアート歴史上では、空白の時代である。1974 年に行われた全国美術展で「中国画・油絵」「版画」の図録が出版されたが、作品は全て原則に沿って、政治的テーマを忠実に描いているもので、しかも、作者はほとんどアマチュアレベルの画家であっ

た。文化大革命期に描かれた作品はすべて政治的な色彩を濃厚に帯びている。

文化大革命が終結し、中国アートの歴史は転換期に入った。新中国成立以来、1950年代におけるソ連との短期間の交流を除くと、総じて西欧のモダンアートの紹介は非常に遅れていた。この間は、アート領域において、「鎖国」の時代であったとも言える。アーティストたちは西欧のモダンアートへ強い憧れを持っていた。西欧モダンアートの紹介において、保守的な立場であった『美術』でさえ、積極的に新しい動きを取り上げるようになった。文化大革命期の紅衛兵運動[6]、知識青年の「上山下郷」[7]などの事件と出来事を表現したアートは、国内で多く注目され、大反響を呼んだ。そのほか、多くの団体がアートの展覧活動を行う中で、1979年に結成された星星画会は、その急先鋒として重要な役割を果たした。それまでになかった新しい美術観を示し、「自己表現」というキーワードを提示したのである。星星画会の成立後、1985年まで中国各地に青年美術集合体が相次いで現れていた。その時期には改革開放政策も進展して欧米のモダンアートが大量に紹介され、これに刺激を受けた若手のアーティストたちによって、「八五美術運動」[8]といわれた美術運動が一斉に巻き起こった。「八五美術運動」の成果は、1989年の「現代主義芸術大展」において集約的に示された。展覧会場には、ポップアートやシュールレアリスムなど、欧米のモダンアートを見倣った様々な作品が展示され、80年代のアートの総決算とも言われた。この展示は中国内外に大きな注目を集めた。

周知のとおり、1989年4月には始まった民主化運動が「6.4天安門事件」の悲劇に終わった。1990年代は天安門事件以降の政治的な空白期で、多くの若者が無力感にとらわれていた。それまでのモダンアートの熱い潮流は国の弾圧により、一気に冷え込んでしまった。アーティストたちにとって、天安門事件以降、自由なアート活動は制限された。そこで、多くのアーティストは敗北感と虚無感にとらわれ、そして中国のアート界に失望して、国から離れて海外でのアート活動を続けた。

こうした状況の下で、中国のアートはシニカルな「玩世」現実主義の時代に入った。『シニカル・リアリズムは中国語で「玩世」現実主義である。虚無に浸り冷ややかに世間を傍観する。物事を茶化して不遜にふるまう態度である。気だるく、アンニュイな雰囲気となる。』（牧陽一 2007：p93）「玩世」現実主義は1990年代初期の中国アート潮流の一脈を形成した。それまでの伝統的な作品に見られないこれらの傾向は、欧米では一種の中国趣味として受け取られ、好奇と興味も加わって、アート市場で歓迎された。本来欧米人には理解できない山水画のようなものと思われていた中国アートが、急に親しみを持って人気になった。その代表な人物は方力均[9]である。

方力均は1992年以降、海外開催の中国展や重要な国際展に出品し、欧米の芸術関係者から注目を集めた。1994－1995年に日本で開催された第4回アジア美術展で初めて日本人に紹介され、その後、1996年に東京で「物語ない時代の人間像」をテーマにした個人の回顧展を行った。作品の特徴は坊主頭の人間像でよく知られている。（**図3**）

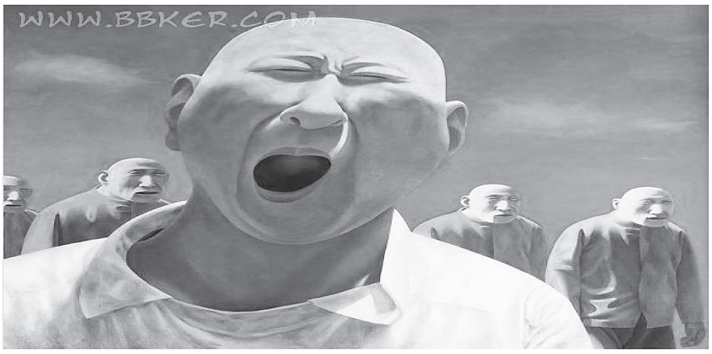

図3　方力钧「打哈欠的人」

（http://www.bbker.com/D61047.html　2011.8.3）

90年代半ばから、大衆消費社会の快楽が前面に押し出された。派手な画面で、大衆の好む物を描きこむ作品が続出することになった。特に、画面においしそうな洋食ハンバーガー（**写真1**）、コーラ、オバマの頭に毛沢東の体（**写真2**）などの雑多なものを登場させた。目を射すような原色の氾濫、荒唐無稽に溢れるもの、これらは中国人特有

の派手で過剰な表現である。人とものとの関係も、リアルな消費社会の快楽を表現している。

写真１　羅氏兄弟作品　　　　と　　　　写真２　偉大领袖奥巴毛

（筆者撮影）

1990 年代の急激な経済成長は、アーティストにとって「6.4 天安門事件」の挫折感から脱却する契機となった。市場経済の波に乗って、市場を意識した商品価値の高い作品が多く制作されるようになった。オークション市場は発展し、アートの商業化、国際化が一層進んだ。羅氏兄弟の「ハンバーグとコーラ」（**図 4**）という作品は、オークションサイトにて 120,000 元で販売されている。

図 4　羅氏兄弟の「ハンバーグとコーラ」

（http://pm.cangdian.com/Data/2006/PMH01102/CD002931/html/CD002931-0097.html　2011.8.3）

現在、経済優先の国家目標が決められ、欧米との交流が非常に盛んになっている。西洋の現代絵画が相次いで中国の美術館に現れ、アーティストたちは中国絵画の伝統テクニックを意識しながら、一方で海外の潮流にも関心を持つようになった。また、多くの中国人画家は、積極的に、海外の美術展に参加し、多くの作品が買われた。

海外で活躍するアーティストはアメリカ、日本のみならず、フランス、イギリス、ドイツ、イタリアなどにも多く散らばっている。

中国当代アートは長い伝統を守りながら、欧米アートを吸収し、独自の民族表現を追求してきた。こうした表現方法は今まで以上に世界からの注目を集めている。

図 5 は、2009 年に中国当代派芸術展「星星美展」で選ばれたこの 30 年間、最も代表的な中国当代アート作品である。

図 5　北京東村「無名の山のために 1 メートル高くする」1995[10]

（http://news.99ys.com/20091117/article--091117--32506_1.shtml 2011.8.3）

1-2　海外からの中国当代アートに対する評価

フォーブス誌によると、2008 年の全世界のコレクション市場において、中国当代アートの人気は、従来のランキングリスト上位のダイヤモンド、イラン当代アート、ファッション撮影、古貨幣を抜き、一躍、ランキングの首位に躍り出た。

そして、2008 年 4 月 29 日の The New York Times 誌に「Amid Asian Art Boom, Manhattan Gallery to Open Branch in Beijing（アジアアートブーム最中、マンハッタンギャラリーの北京への支店）」という題の記事を掲載された。（その一部の翻訳したもの）

中国当代アーティストたちの作品がオークションで数百万ドルで売られ、アジア人のコレクターが増えている中で、マンハッタンギャラリーが北京で根をはる計画を発表することは時間の問題であった。

ペース北京は、ニューヨークのチェルシーに相当する。「798 工場地区（「798 芸術区」）は北京で 3 番目の大きな観光魅力を持つスポットである」。（万里の長城と紫禁城の次に）

ペースウイルデンスタインは、中国当代アートの中でも最もホットなアーティストを扱っている。ひとりは張環、コンセプチュアルアーティストであり写真家で、北京郊外にある東村というところで、活動している。もう一人は、張暁剛[11]、形象美術を描き、その作風は、シニカル・リアリズムとして知られている。（「血縁シリーズ」の肖像画は、1920 年に撮影された家族写真を基にして描かれたものであるが、香港の Sotheby's で 600 万ドルの値がついた。月間最高記録であった。）

張暁剛は 1980 年代に世界の注目を集めた中国の前衛的な画家の一人で、1995 年にヴェネチア・ビエンナーレ展に招待出品した。そして、その後も世界各地の現代美術展で、中国の当代絵画表現の重要な作家として活躍を続けている。「血縁シリーズ」（**図 6**）は、中国人家族の肖像写真を基に、その深い精神世界にまで潜り込み、社会の中での家族の内面を見事に描き出した優れた作品群であるとの評判を得た。

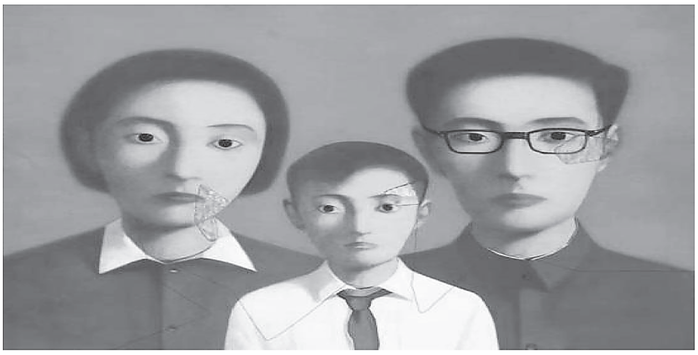

図 6　張暁剛「血縁シリーズ」

（http://www.artworld.jp/artist/artist30/artist3008.html 2011.8.3）

日本では、2008 年 12 月 9 日から 2009 年 3 月 22 日まで、国際交流基金は国立国際美術館で「アヴァンギャルド・チャ

イナ ―<中国当代美術>二十年―」展[12]を開催した。近年の急激な経済発展や北京オリンピックなどで話題沸騰の中国であるが、アート界においても今、中国当代アートが世界中から注目を集めている。

本美術展では、中国当代アートの新起点となった1980年代を出発点に、ここ20年間の流れをたどりつつ、すでに評価を確立したアーティストたちから、今後活躍が期待される若手まで、特筆すべきアーティストたちに焦点をあてて、その代表作を展覧するものである。絵画や彫刻だけでなく、パフォーマンスや映像など、さまざまな表現を使って展開されてきた中国当代アートの知られざる魅力が紹介された。

アートの商業化、国際化とともに、中国当代アートは、日々に益々世界という大きな舞台に浸透していく。今日の中国社会・文化・生活をリアルにアートという形で表現し、より外国人は中国・中国人を理解しやすくなる。また、北京・上海・広州などの大都市では、ビエンナーレが開催され、中国当代アートの最新情報を発信していく。特に、筆者が注目したのは北京にある「798芸術区」である。当芸術区はすでに中国当代アートの発信聖地となり、一方、観光資源として地域活性化の経済効果も表れている。

2. 観光資源としての中国当代アート

2-1 観光アートとは

「観光アート」とは、近年になって登場した新語である。2010年10月20日に発行された山口裕美の著作『観光アート』で本のタイトルになった。山口氏によると、この「観光アート」という言葉は、二つの意味を持つ。一つ目は「アートを見ることを目的とした旅のこと」。二つ目は「アートを活用した観光、地域活性化のこと」を指すという。

今日、アートを見るために旅に出るという、かつては見られなかった新しい観光客の動きが世界各地で起き、同時に、アートを中心としたイベントやプロジェクトが世界中で活発に開催されている。つまりアートは、現地の人々の日常生活、そして地域の活性化に対して、非常に重要な役割を果たしているのである。それでは、前文で記述した二つの意味から、具体的な成功例を挙げてみる。

その事例は、オタク聖地――秋葉原である。現在、ゲーム、アニメ系ショップ、同人誌[13]専門店、メイド喫茶等が密集する地域及びそれらに類する所はオタクが集まる場所で、オタク街とも呼ばれ、その一部の者にとっては聖地化している。最も代表的な所は東京の秋葉原である。2005年につくばエキスプレスが開通し、ヨドバシカメラが出店して秋葉原が生まれ変わった。今の秋葉原はそういった面を肯定的に活用し、日本のポップアートを世界に向けて発信する国際観光地としての地位を獲得しつつあり、国土交通省も外国人向けに秋葉原を積極的にアピールしようと取り組んでいる。2005年2月に、政府は「ビジット・ジャパン・キャンペーン」[14]を実行し、外国人向け秋葉原マップを制作・配布して割引キャンペーンなどを行っている。日本のマンガ、アニメ、ゲームなどが、「ジャパン・クール（Japan Cool）」[15]と言われて世界の若者たちに支持されている。世界中から日本へ、そして秋葉原にやってくる若者たちの中には、AV機器を中心とした家電に加え、いや場合によってはそれよりもむしろ、日本でしか手に入らないマンガや、アニメ、ゲームソフト、フィギュアなどを求めている者もいる。ここは単なるエンターテインメントにとどまらず、「コスプレ」[16]や「コミケ」[17]、カードの交換など、「オタク」的なライフスタイルを伴い、国境や言葉、宗教を超えて共有、共感を生むムーブメントを生み出している。

今や、「売っているものを集めればロケットでさえ作れる」といわれる日本一の電気街である秋葉原は、美少女系のアニメキャラクター商品やゲームを扱う店、「お帰りなさいませ、ご主人様」とメイド姿のウェートレスが客を迎えるメイド喫茶が集まり、「オタク」「萌え」文化の発信地としての知名度の方が高くなっている。年々多くの外国人が、世界中からツアーを組んでやってくる。旅行者は、アジア人から、日本ポップアートとなるアニメとマンガを見て育った西洋人の若者まで様々である。彼らは日本文化、とりわけポップアートに引き寄せられて東京に来ている。マンガ・アニメ・フィギュラをはじめ、日本で流行している服やアクセサリー、携帯のストラップなどを大量に購入し、そして、日本の流行雑誌に参考し、日本人の化粧の仕方を勉強する。

日本のポップアートは、日本文化の海外への進出、そして日本を活気づける道具にとどまらず、日本経済再成長のエンジンという大きな役割を果たしている。中国・北京の中関村という所は、日本ポップアートの影響を受け、美少女系のアニメキャラクター商品やゲームを扱う店がたくさん出現し、現在中国の秋葉原と呼ばれている。

次の節では、急成長してきた中国の観光アート聖地の北京「798 芸術区」について紹介する。

2-2 観光地としての北京「798 芸術区」

北京「798 芸術区」は北京市朝陽区酒橋仙路大山子地域に位置している。本芸術区は現在の北京七星華電科技集団有限責任公司（略：七星集団）の 718 工場区に、23 万平方メートルの敷地を持っている。

元来718工場区は1957年にドイツの援助で建設された北京華北無線電連合機材廠で、718 連合廠とも呼ばれていた。元軍需工場として、赤レンガで建てられた建物はヨーロッパスタイルである。（**写真 3**）1964 年に、718 連合廠が解散し、706 廠、707 廠、718 廠、797 廠、798 廠と 795 廠となった。2000 年 12 月に、再び統一され、現在の七星集団となった。

土地の有効利用、そして、より地域活性化のために、七星集団は一部の産業を移設させ、一部の敷地と工場を一般に貸し出した。整備された工場敷地、そして、交通の便利さ、さらに、おしゃれな建物が、多くのアーティスト・アート団体に注目された。現在、ギャラリーはもちろん、おしゃれな喫茶店やブティックが建ち並び、アート関係者はもちろん、おしゃれに敏感な若い人々の間でも人気の場所となっている。アーティスト・アート団体が最初に 798 廠という敷地に入ってきたという理由で、このエリアは「798 芸術区」と名付けられた。（**写真 4**）その代表的な人物は黄鋭[18]である。

写真 3　建物の内部構造　　　と　　　写真 4 「798 芸術区」の創意広場
（筆者撮影 2011.5.5）

「798 芸術区」は設計事務所、ギャラリー、アーティストのスタジオ、ファッションショップ、レストラン、バーなどで構成されている。現在、国内（大陸、香港、台湾）、国外（仏、伊、英、蘭、独、豪、日本、韓国）からのアーティストの個人スタジオをはじめ、ギャラリー、マンガ・アニメ産業、メディア、出版社などの文化団体が 400 個あまりある。**写真 5** は北京「798 芸術区」の案内図である。

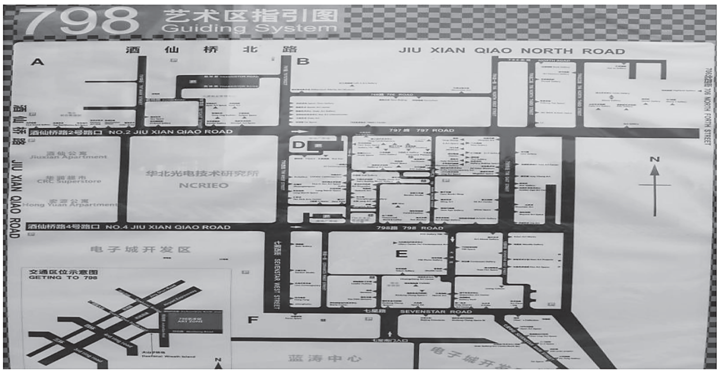

写真 5　北京「798 芸術区」案内図
（筆者撮影　2011.5.5）

代表的な機構は以下の二つがある。

Ullens 当代アートセンター（略：UCCA）（Ullens Center For Contemporary Art）は一つの非利益団体で、コレクターUllens 夫婦が出資し、2007 年 11 月に設立された。本センターでは、多くの有名なもしくは若手のアーティストの作品を展示され、アートの教育、そしてアーティストたちの交流の場を目的として運営されている。アーティストの作品をより多くの大衆に紹介でき、学生たちも無料でアートに関する講座を受けられる。2011 年 4 月に、本センターはサザビース香港でコレクションの一部を売却し、中国民生銀行と提携することを発表した。

ペース北京（Pace Beijing）はニューヨークペースギャラリーが 2008 年 8 月 8 日に北京に開設した支店である。ペースギャラリーは 20 世紀 60 年代から現在まで、質が高い展覧会と一体化した運営システムで、世界トップレベルのギャラリーとして発展してきた。北京支店の設立にあたって、アジア当代アートの発展、そして、中国と西欧アートの交流、アジアアート市場の国際化を図る目的とした。現在、ペース北京は「798 芸術区」で最も大きなスペースの 2000 平方メートルの敷地を使用している。

2002 年に、国内・国外のアーティストが「798 芸術区」での活動は一番ピークとなった。一年中、多くの個人スタジオとギャラリーが駐在した。2003 年に「再造（復興）798」というテーマで当代アートイベントを行い、一躍有名な場所になった。その以降、「798 芸術区」へ訪問したり、見学したり、学習したり、交流したり、商業活動をしたりする人が急激に増え、ますます北京市のアート観光の重要の一部になっている。2004 年に、フランス大統領の妻は北京の「798 芸術区」を訪問し、ここが中国芸術の新しい起点であるという感想を述べた。

2005 年に、「798 芸術区」は国から正式に「国家文化創意産業総合区」と定められた。2008 年に、オリンピックが中国･北京で行い、国際オリンピック委員会会長が北京へ視察した際にも、「798 芸術区」への訪問を指示した。近年、海外からの多くの観光客が訪れ、旅行会社は楽しめる中国当代アートツアーを組み、国内外の観光客を連れてきた。（写真 6 と写真 7）

写真 6　楽しんでいる韓国人の修学旅行生（左）と　写真 7　吟味している欧米観光客（右）
（筆者撮影　2011.5.5）

3. 北京「798 芸術区」からの考察

3-1 文化政策としての北京「798 芸術区」

本稿で論じる文化政策とは、アートを含む様々な「文化」を利用して、国家の威信を誇示し、国民国家のアイデンティティを形成し、市民や労働者の教化をはかるという目的を持つ。すなわち一国に住む人間集団に共通する行動様式や価値観の形成を通して、国民性を生み出していく政策である。具体的には、文化産業保護と芸術活動振興とを軸としている。

文化政策は、1970 年代に欧米社会に登場した。その背景には当時の都市化現象やマスコミの発展に伴う大衆文化の拡大、国際化や植民地解放に伴う多文化化などの社会の大きな変動がある。文化政策は今日の社会における文化・アートのあり方という面から批判を受け、その後、財政的な危機が拡大する中で、政策の公正さと効率性という面が問われていった。各々のアート活動や美術館などといった文化施設は、利用者が次第に富裕層とインテリ階層に

限られるようになり、公的な助成や寄付が減っていく。芸術活動の「公共性」が失われていく中で、その政策の見直しを求められていった。

当時の中国社会は文化大革命時代つまりアート分野における「鎖国」の時代であった。芸術の発展はゼロに近かった。しかし近年、中国の急激な経済発展とともに、中国当代アートも未曾有の繁栄の時代を迎えつつある。2003年に、米週刊誌「Newsweek」にて、北京は「世界の最も魅力を持つ12都市の一つ」と評価され、その理由は「798芸術区」の存在と発展であると言われたが、2004年に北京市・区の両行政府は、文化産業を発展させ、近現代建築物を保護するという観点から出発し、「798芸術区」の現状についての調査を行った。2005年に、『北京市文化産業発展企画2004年-2008年』の都市計画書を正式的に公表し、「798芸術区」は北京市の都市計画建設の「国家文化創意産業総合区」と指定された。特に、芸術区内の20世紀50年代のBauhaus式の建物を、重点保護の対象として残される方針が明らかにした。

「798芸術区」はさらに人気が盛り上がり、米国のCNNの調査によると、「798芸術区」が北京の2番目の観光スポットとなったという。以前は、万里の長城と紫禁城に次いで3番目であった。現在、当芸術区の形成の原因、地域の特徴、発展と将来などについては、人文研究者の研究対象となり、また、今後の国家文化創意産業総合区の建設にあたって、貴重なデータとして保存されている。

「798芸術区」から見る文化政策の重要性は2つ挙げられる。まず、創造的なデザインと技術を持つ産業や、美術館、劇場、芸術家、団体が、あるコミュニティや国から生まれただけで、その地域や国への評価が高まる効果を持つ。また、これらの芸術性のある製品、作品などを発表し、陳列し、演奏する施設の近辺では、地域の多様なビジネスを活性化させ、創造性に共感する人々の訪問によっても地域内の事業や観光業が活性化する。

「798芸術区」の成功例を学び、現在、中国各地において、芸術区の建設が計画されている。とりわけ深圳では、市政府は文化産業発展企画の一環として、「深圳22芸術区」（**図7**）を建設している。この芸術区は、中国南方で最大の芸術産業区となり、そして、芸術作品の展覧・投資・コレクション・交易などの中心地となるだろう。珠江デルタ地域の芸術発信地の機能も果たし、積極的に観光客の誘致がなされていくにちがいない。

図7　「深圳22芸術区」

（http://22.cefomsz.com/ 2011.8.15）

最近では、文化産業の地域における展開が注目を集め、「文化による地域活性化」の戦略的な核心部分に、文化産業が位置づけられた。それは、文化による地域活性化において、一方には、地域固有の文化的な要素を持つ文化産業が存在し、他方では、その固有の文化性を評価し受容し、一定の貨幣ストックをもつ他地域の消費者が存在しているからである。現代の経済学では、このような状況を「消費者の生活の質への欲求の高まり」として把握し、「質を求める厳しい消費者の存在」が、「地域固有の質の高い財」を生み出して、両者の交流が情報交流を前提に、経済や産業を活性化させると考えている。

3-2 経済的効果から考える北京「798芸術区」

2007年3月に、北京聯合大学現代休閑方式と旅行発展研究所が、「798芸術区」の観光客・訪問者を対象にして、

研究調査を行った。その目的は「798 芸術区」を観光資源とする意義を考察することである。そして、同年度に「798 艺术区作为北京文化旅游吸引物的参考 : 一个市场自发形成的视角」というタイトルの報告書が公表された。その中で、国内外の観光客の滞在時間と消費額について以下のようにまとめられている。

国内外の観光客･訪問者の平均的な滞在時間は 2 － 5 時間である。十分に整備されず、自発的に発展してきた「798 芸術区」は、観光資源として、今後の観光客・訪問者を誘致する魅力を持っている。

消費に関して、中国国内と国外の観光客・訪問者の差がはっきりとわかる。国内観光客の消費レベルは 0 － 300 元の間で、平均的な消費額は 760.60 元となる。それに対して、国外観光客の消費レベルは 100 － 300 元の間で、平均的な消費額は 844.03 元となる。（「798 艺术区作为北京文化旅游吸引物的参考 : 一个市场自发形成的视角」より）

ここで、一般の観光地と比べてみると、「798 芸術区」の平均的な消費額は 500 元以上であり、北京市の休閑旅行市場の高消費額に位置づけられる。つまり、「798 芸術区」で消費活動を行った観光客は、北京市の休閑旅行市場の高消費グループとみなされる。

「798 芸術区」では、休閑旅行市場の高消費グループを誘致するため、定期的にイベントを行っている。アートプロジェクトとアートイベントには観光客を集める力があること、観光客参加型であること、未来を創造する力が養うこと、外国の観客にも理解できることなどという特色があり、地域活性化、まちおこし、観光振興の目玉になるからである。

例えば､2004 年以降毎年行われている「中国当代アートイベント･大山子国際芸術節」は､100 軒近くのギャラリーやスタジオ、レストランやカフェなどが軒を連ねるアートエリア･中国の当代芸術の拠点として、重要な役割を担っている北京「798 芸術区」で開催される芸術祭である。2004 年の第一回目は、絵画、映像、建築、パフォーマンスなど合計 30 以上のイベントが開催され、100 人以上のアーティストが 11 カ国から集まり、80,000 人以上の人々が集まった。世界中から注目を集め、多くの海外の美術関係者・観光客も訪れた。現在､「798 芸術区」は、政府による支持を受け、創意工夫に溢れた当代アートが公的な場で展覧会を開き、そして、世界の各地に発信していくのである。2011 年の国際芸術節は 9 月 24 日から 10 月 16 日までの予定をしている。

また､「798 芸術区」内の各ギャラリー、スタジオでは、不定期的に展覧会や歌手の CD 新発売会などが行われている。2011 年 5 月に、筆者が現地調査を行った時に、歌手刘惜君の CD 新発売会が行われていた。(**写真 8**）当日、多くのファンが来場して、刘惜君を応援していた。

写真 8　刘惜君の CD 新発売会
（筆者撮影 2011.5.28）

「798 芸術区」内には、おしゃれなレストランが数多く、観光客、アーティスト、ビジネスマンによく利用される。(**写真 9**）また、北京市内での結婚記念写真の撮影地としても非常に人気がある。(**写真 10**）

写真9　おしゃれなレストラン　　と　　写真10　結婚記念撮影の聖地
（筆者撮影 2011.5.28）

3-3 北京「798 芸術区」の発展と将来

21 世紀は、それ以前の国家間の競争に代わって、世界の諸都市・地域が主役となってそれぞれの産業、文化、生活などの各分野にわたって独自の魅力や活力を打ち出しながら、互いに競い合い結びつきあう都市・地域のいわば大競争時代になる。それぞれの都市が、独自の多様な魅力やポテンシャルを生かし、どのような将来像を描くことができるか。このことが、それぞれの都市にとっての大きな戦略的課題となる。

2008 年にオリンピック大会が中国・北京で行われ、北京の都市建設は飛躍に発展した。物価・地価・人件費などの生活コストが上がる中、「798 芸術区」の今後の発展は楽観視できない。これまで安い賃貸でアート創作の生活を維持してきたアーティストたちは、高価な賃料を払えなくなるからである。事実、最近になって、多くの個人スタジオやギャラリーが「798 芸術区」から去っていった。この現象は、20 世紀 60 年代のニューヨーク市のソーホー[19]（SoHo）にもあった。

ソーホーとはニューヨーク市のマンハッタン島南部にある地域である。この地域は、アーティストやデザイナー町として 1960 年代から 1970 年代にかけて知られるようになった。ソーホーには、廃業した繊維・衣服工場や倉庫など、19 世紀末に建てられた鋳鉄建築が多く空いており、賃料が非常に安かった。ロフトは天井も高く窓が大きく、明るい部屋で作品制作ができるため、第二次世界大戦後からお金のないアーティストやデザイナーたちのロフトやアトリエに転換されていった。ロフトは本来居住目的には使用できず、ソーホーは住居地区でもないため、彼らの居住は不法居住であった。さらに彼らの集うレストランやギャラリー、ライブハウスができ、多くの歴史に残る個人展覧会や朗読会などが開かれていた。

しかし、1980 年代以降、高感度な地区としてエリートたちや観光客が集まるようになり、のどかな雰囲気は急速に失われていく。エリートたちや観光客相手の超高級レストランや高級ブランドの路面店が進出してくると、街はにぎやかになる一方、喧騒がひどくなり、落ち着いて仕事やアート鑑賞のできる雰囲気ではなくなり、さらに致命的なことに地価が急騰した。やがてアーティストたちもギャラリーも、古くからの貧しい住民たちも、家賃が払えずもっと安い地区に追い出されてしまった。ギャラリー街は主にチェルシー地区へ、アーティストやデザイナーらはその他ロウワー・イースト・サイド地区・トライベッカ地区、ノーホー地区、ノリータ地区、ハーレム地区へ移り、さらにそれらの地区も高級化してしまい、現在はマンハッタンをも出てブルックリンにまで移りつつある。

21 世紀の今日、世間に広まったイメージとはうらはらにソーホーにはアーティストはほとんど住んでおらず、金持ち相手のギャラリーやブティック、高いレストラン、若い高給ビジネスマンの住まいばかりの地区となっている。

「798 芸術区」はソーホーと同じ道を歩んでいるようである。1995 年に、798 地域の工場が空いており、一日 0.3 元 / 平方メートルで賃貸した。2004 年になると、一日の賃貸料は 0.726 元 / 平方メートルで、2008 年の時点では、一日 4 元 / 平方メートルになった。賃貸期間は 1 年から 6 年までバラバラである。13 年間では、賃貸料が 10 倍以上はね上がったのである。

2011 年 5 月、筆者は「798 芸術区」内の小物コレクションハウスの店長[20]をインタビューした。当小物コレクションハウスの店長と家族、主に二人が店を経営して今年で 5 年目になる。商品は、手作りの革製品が中心で、アパレル製品もある。鞄、財布、ノート、T シャツなども揃っている。平日に調査を行ったからであろうか、客はいなかった。

その特徴は、大きく2点にまとめられる。

①観光シーズンの影響が大きいこと

質問1、一日どのくらいの人が入ってくるか？買い物はしていくか？

日によってバラバラである。閑散期の平日は20-30人くらいで、土日は50-60人くらい。何か買っていってくれる人は、僅か4、5人である。しかし、繁忙期になると、平日でも60-70ぐらいの人が入ってくる。土日の場合は70人以上ある。物を買う人は普通の倍になる。

質問2、外国人と中国人と、どちらのほうがよく買うか？

やはり中国人がよく買う。外国人のほうが、価値が分からないわりには、もっと安くしてくれとよく言う。

質問3、現在、「798芸術区」は観光地として、知名度が高くなっていて、商売にはいい影響を与えたか？

少し影響があるが、繁忙期と閑散期がはっきりと分かれているので、閑散期になると、他の事業に力を入れている。

②賃貸料が高くなる一方で、経営が厳しくなること

質問4、収入と支出のバランスを取れているか？

年間の売上と支出を計算してみると、損はしてない。しかし、いつも安定しているわけではなく、悩みながらやっている。多くの店は潰れてしまった。当店もいつかそうなるだろう。

質問5、一番困っていることは何か？

年々賃貸料が上がっていくわりに、売り上げがなかなか伸びない。「798芸術区」には、賃貸料を払わず、逃げてしまう人もいた。先日、地域会議に参加したが、何人かのギャラリーとスタジオのマネジャーは、儲からないからやめると言った。経営者はみんな悩んでいる。

筆者はその後も、「798芸術区」に関する資料を収集し続けているが、現在もなお、有効な管理方針が打ち出されていないようである。地方政府、そして「798芸術区」発展促進会が発行した正式な管理方針と運営機制が必要となっている。

おわりに

本稿では、中国当代アートが観光資源として果たす機能について、理論と事例分析という形で論じてきた。2011年4月から6月までの中国・北京「798芸術区」での調査に基づき、当芸術区の現状・発展と将来について考察した結果、当該芸術区の今後の発展には政府と公的な機関による正式な管理方針が必要になってくることがわかった。どのような管理方針が「798芸術区」の発展に有効であるかについて、筆者はこれからの課題として、研究を続けていきたいと考えている。

注

1　1894年江蘇省に生まれる。中国の画家、中国現代絵画の礎を築いた美の巨匠である。1917年日本に留学した。1919年からフランスやベルリンの美術学校で学んだ。帰国後は1928年に北京国立美術学院などで教鞭をとる。1950年に、中華全国美術工作者協会主席である。

2　1928年に生まれ、山西省平遥人。1947年に晋察冀辺区華北聯合大学文芸学院美術系に入学し、1950年に中央美術学院に教師を務め，中国画系主任を担当した。現在、中央美術学院教授、中国美術家協会会員。1949年に作られた作品である。

3　『人民美術』の後身である。

4　《开国大典》は现代油画の典型的な作品である。

5　毛沢東が1958年から1960年まで施行した農工業の大増産政策である。

6　中華人民共和国の文化大革命時期に台頭した全国的な青年学生運動。学生が主体であるが、広義には工場労働者を含めた造反派と同じ意味で使われることもある。

7　文化大革命期の中華人民共和国において、毛沢東の指導によって行われた青少年の地方での徴農（下放）を進める運動のことである。

8　新潮美術運動である。

9　1963年、河北省に生まれ、現在、北京で活動している油彩画画家である。

10　北京の東郊外の大山庄で「北京東村」と呼ばれる実験芸術家のグループである。本作品はグループの作品の中で、最も高い評価された

作品である。

11　1958年、雲南省に生まれる。1982年四川造形芸術院油彩画学部を卒業した。1986年に「西洋芸術研究振興委員会」の設立メンバーとなる。四川造形芸術院講師を経て、現在も意欲的に制作を続けている。

12　本展示は2008年8月20日から10月20日まで、東京の国立新美術館にも展示された。

13　アニメやマンガ、ドラマ、映画、小説、ゲームなどのパロディや二次創作物の自費出版書籍である。素人が書いた作品が大半であるが、プロの作家も同人誌を制作しているケースが多々ある。これらは一般の書店ではなく、通販や同人誌専門店、そして同人誌販売イベントで販売される。

14　国土交通省「グローバル観光戦略」。社団法人に本ツーリズム産業団体連合会（TIJ）が「秋葉原新発見ツアー」という無料ガイドを実施しており、英語、中国語、韓国語の表示が選択できる。

15　アニメ、マンガも含めた日本のポップカルチャーが「かっこいい日本」として海外で高く評価されていることを紹介する際に用いられる表現。ダグラス・マッグレイが2002年に「フォーリン・ポリジー」に掲載した論文「日本のグロス・ナショナル・クール」において、日本の文化力（GNC、GNPのもじり）の高さを再評価すべきとしたことが話題を呼び、この言葉が引き合いに出されるようになるきっかけとなった。

16　コスチューム・プレイを語源とする和製英語で、仮装の意味である。狭義では、アニメなどの登場人物のキャラクターに扮する行為を指す。

17　コミックマーケットの略語である。毎年夏冬の2回、東京近辺の見本市会場などを借りて行われる、ファンの自主運営による最大のマンガ同人誌即売会の名称である。

18　1952年に北京で生れた。中国当代芸術史上で最も有力な芸術家である。1979年に「星星美展」を発足した。

19　ハウストン通り南（South of Houston Street、ヒューストンとは発音しない）という意味であり、より早くから繁華街として有名だったロンドンのソーホーをも意識してもいる。範囲は、北はハウストン通り、東はバワリー通り、南はキャナル通り、西は六番街といった具合である。

20　店長の詳しい情報について、プライバシーの関係で、公表しない。

参考文献

『新中国美術図史 1949-1966』　陳履生　2000　中国青年出版社

『中国現代アート　自由を希求する表現』　牧陽一　2007.2.10　講談社

『アウァン・チャイナ――中国の現代アート――』牧陽一　1998.9.25　木魂社

『現代中国の文化』　張競編著　孫玄齢　潘世聖　陸偉栄　魯大鳴　2005.6.10　明石書店

『観光アート』　山口裕美　2010.10.20　光文社

『文化政策を学ぶ人のために』　上野征洋　2002.8.30　世界思想社

『文化観光論――理論と事例研究　上・下巻』　M.Kスミス・M.ロビンソン編　阿曽村邦昭　阿曽村智子訳　2009.　4.25　古今書院

『国際観光学を学ぶ人のために』　堀川紀年　石井雄二　前田弘編　2003.12.20　世界思想社

『ソフトパワー時代の外国人観光客誘致』　島川崇編著　2006.9.15　同友館

『アートマネージメント』　伊東正伸　岡部あおみ　加藤義夫　新見隆著　2003.4.1　武蔵野美術大学出版局

『はじめての国際観光学』　山口一美　椎野信雄編著　2010.6.20　創成社

『観光大国　中国の未来』　国松博　鈴木勝著　2006.2.26　同友館

『進化するアートマネージメント』　林容子　2004.5.21　レイライン

『現代アートのビジネス』　小山登美夫　2008.4.10　アスキー新書

『文化によるまちづくりと文化経済』　端信行　中谷武雄著　2006.3.30　晃洋書房

『文化政策学：法・経済・マネージメント』　後藤和子　2001.8.30　有斐閣

『観光の経済学入門――観光・環境・交通と経済の関わり――』　中崎茂著　2002.10.25 古今書院

参考サイト

798 芸術区　http://www.798art.org/

シンセン 22 芸術区 http://22.cefomsz.com/

尤伦斯当代艺术中心 http://www.ucca.org.cn/

佩斯北京 http://www.pacebeijing.com/cn/index.html

中际论坛 http://zjlt.artron.net/schedule_en.php
中国当代艺术网 www.artc.net.cn
Art365 在线艺术博览会 www.art24365.com

Tourism and Chinese Contemporary Art: 798 Art Zone in Beijing

WANG Yi

Abstract:
Chinese contemporary art has come to attract attention from the world suddenly, and it holds appeal for many tourists from both inside and outside of China. This paper focuses on 798 Art Zone, an area of contemporary art galleries in Beijing, examining, in particular, its role as a tourist attraction. The research is based on a survey of shop owners and tourists at 798 Art Zone. In the paper, the history of Chinese contemporary art, its present situation, and its development are stated first. Then, 798 Art Zone is explained. Finally, the function of 798 Art Zone as a tourist attraction is considered. Three points are made clear. First, rooted in the long tradition of Chinese art, and absorbing the influences of European and American art, Chinese contemporary art pursues an original national expression. Second, 798 Art Zone has became the second biggest tourist draw in Beijing. Third, one cannot be optimistic about the continued development and future prospects of 798 Art Zone because of increased land prices and defects in its managerial system. It is necessary that a formal management plan and administrative mechanism be created by the regional government and the Development Promotion Association of 798 Art Zone.

Keywords: 798 Art Zone, Chinese contemporary art, tourist attractions, regional vitalization

観光資源としての中国当代アート
――北京アートファクトリーの事例からの考察――

王　　　　屹

要旨：
21 世紀、中国では、アートの商業化と国際化が急激に進展している。中国当代アートは一躍、世界的に注目され、国内外の多くの観光客を惹きつけている。本論の目的は、「798 芸術区」からみえる観光資源としてのアートの役割を明らかにすることである。本研究は、この芸術区でのフィールドワーク調査に基づき、中国当代アートの発展と注目される要因について、観光地となった「798 芸術区」の由来と現状について、文化政策·経済的効果の視点から、芸術区の発展と将来について検討した。その結果、中国当代アートが長い伝統を守りながら、欧米アートを吸収し、独自の民族表現を追求してきたこと、芸術区が北京の 2 番目の観光スポットとなったこと、地価の高騰、管理システムの不備による芸術区の発展と将来に対する不安があることが明らかになった。地方政府、そして「798 芸術区」発展促進会が発行した正式な管理方針と運営機制が必要である。